

豊田市 郷土資料館 だより

No.32

Toyota City Museum
Of
Local History



作州飛地一枚絵図(天保8年)
作州の12の村絵図を一枚に
まとめた貴重な絵図
(豊田市郷土資料館所蔵)



福谷村絵図(寛延3年8月)
内藤藩領絵図では最も古い絵図
(豊田市郷土資料館所蔵)

目次

- ・企画展開催レポート 『古絵図』展—————2
- ・郷土史調査レポート—————3
- ・心のふるさと無形民俗文化財 祭り・行事・技————4
- ・郷土の史跡めぐり—————5
- ・発掘資料モノ語り・収蔵資料の紹介—————6
- ・平成11年度の主要事業報告—————7
- ・文化財シリーズ・資料館ニュース—————8

「古絵図」展

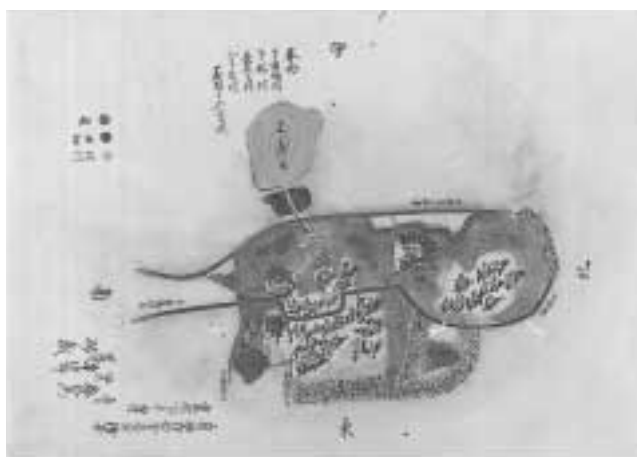
～江戸時代の村や町の姿を絵図から探ってみませんか～

平成12年6月2日(金)～7月30日(日)

郷土資料館は、江戸時代の絵図を250点余り所蔵しています。その多くは挙母藩の領主であった内藤家に伝わった史料で、村や町の状況を報告する目的で描かれたものです。今回の「古絵図」展では、この旧挙母藩の絵図を中心に、市内に遺された貴重な絵図を展示します。以下に展示史料から2点の絵図を紹介します。

絵図から村の姿をさぐる・村絵図

村絵図を見てみましょう。(写真1)この金谷村絵図は、寛延2年(1794)の年号が記されています。この年は、挙母藩の領主が本多氏から内藤氏にかわった年です。新しい領主に村内の様子を知らせるために描かれた絵図と考えられます。ただ、この絵図の村役人の名前には印がありません。そのため後年の写しの絵図ではないかと考えられています。



金谷村絵図 (48×32cm) (写真1)

さて金谷村(現・金谷町周辺)には大きな寺社が3つあります。勝手神社、三光寺(金谷庚申)、福満寺です。これらの寺社は今もありますから、ここから現在の地図に当てはめてみるができます。村内を南北に通る道は、1つは「挙母より大濱道」と書かれているため大濱街道であることがわかります。またもう1つの道は左右に家が建ち、村の中心的な道と呼べるものです。この道は、今の三光寺東側の道と考えられるため、この時代の村の中心地を推定できます。この村の中心に、「御高札」と「郷蔵こうくら」があります。高札とは、領主からの禁止規則等を書いた板のことです。郷蔵こうくらは年貢米の保管用に建てられたもので、村役人が管理する蔵です。

また村の西にある上庄司池は、「挙母、下市場村、下林村、長興寺村、金谷村 右村々入会池」と記され

ています。絵図を見ると金谷村の田畑はこの池からの水で潤っていると考えられますが、入会池とあるため他の村へも水を引いていたことがわかります。この池は、明治になって枝下用水が完成した後に不必要となり、現在は残っていません。

最後に絵図の北東の端に「古城」と書かれた場所があります。これは鎌倉時代末期に中條景長により築城されたと伝えられる衣城です。現在は、縄張りの遺構が一部確認されるだけとなっています。

こうして見てみると、江戸時代の村の姿が少しは想像できるのではないのでしょうか。

争いの歴史を知る・裁許さいきょ絵図

裁許絵図と呼ばれるものがあります。(写真2)これは、境界争いなど領主の異なる村同士の争いに対し、幕府の評定所が裁決を下した時の絵図です。裏面には審議を行った奉行の名前・印とともに裁決文が記されています。



山境界論裁許絵図(147×213cm)(写真2)

この絵図は、現在のトヨタ町周辺のもので、ここは論地ケ原ろんちがはらという呼び名も残るとおり長く山争いが続いた土地です。これは宝永元年(1703)に提出された絵図で、表面には岡崎領の山、御林(幕府の領地)、挙母領山が描かれ、その北東の端と中央部分に墨の線が引かれ奉行の印が押されています。この境界線が幕府が裁決を下した境界です。裏面の裁決文には、勘定奉行4名、江戸町奉行3名、寺社奉行3名の署名と印があります。こうした絵図は争いに関係した村がそれぞれ保管し、お互いに取決めを確認しました。

論地ケ原の争いは、この裁決だけでは解決せずその後も続きました。(伊藤智子)

明治初期の西加茂郡の産物と風土

『愛知県西加茂郡地理小誌 全』から

地方組織としての郡制が復活したのは明治11年のことです。豊田市域では旧来の加茂郡が東西に分割、再編されました。西加茂郡長に田中正幅、東加茂郡長に辻左右が就任しました。西加茂郡の領域はほぼ今日の西加茂郡と豊田市の中・北部を含めた区域です。市域南部は碧海郡で町村合併により郡名はすでに消えてしまいました。当時の郡内の様子を知る資料は意外に乏しく、町村誌が編纂されるのは明治20年代半ばまでまたねばなりません。

本館所蔵資料のなかに『愛知県西加茂郡地理小誌 全』と題され、明治15年に編集された小冊子が目にとまりました。おそらく学校で用いられた教科書と思われます。冊子、A 5 版程の大きさと綴じ、15丁、木版印刷、挿絵5点から構成されています。田中正幅、川崎種次郎編集、文会堂発行、出版人吉田桑吉の記載があります。時の郡長田中正幅の監修であり、文会堂は当時挙母にあった田中郡長が設立した出版元、書籍販売所であったと考えられます。

内容は郡内の自然景観、産物が簡潔明瞭な筆致で記され、今日では失われた風物がいくつかあります。ここにその一部を記してみました。

総論で西加茂郡の形が弓具の柄に似て、145村あり、耕地が15,237町歩(ha)、戸数9,200余、人口38,200余、馬830頭、牛僅かに4頭、風俗は敦樸、南部は肥沃で穀菜、綿、藍を栽培、糸、布を織るとあり、北部は急峻な地形で耕地は少なく、養蚕、製紙、産馬、炭焼き、陶土採掘を生業としていると記しています。

つぎに各村の項で挙母村は商工地で矢作川西岸にあり、水運の利すこぶる良とし、挙母綿は著名、郡役所、小学校、種子交換所があり、陶器市や馬市が年2回開かれていました。花本村は小村であるが、商業が盛んで毎月市が開かれ、村中で麴を生産し、花本麴の名が聞こえていました。平井村は川湊で木材、薪炭を買い、大々蔵連山(小原村)の榧、樅、杉、桧、勘八山には松茸が生え、その名は近隣によく聞こえていたと述べられています。

滝の紹介では猿投山麓の広沢の滝、鈴ヶ滝、西細田村(小原村)平畑の滝をあげ、なかでも広沢の滝は有名

で夏には涼を求める客が絶えないとあり、当時の夏の風俗とにぎわいがしのばれます。

飯田街道については田^た^{もみ}、上伊保、殿^{どの}貝^{がい}津、下伊保、四郷、越戸、平井、東広瀬、力石、中金、小白見、野口、中切、東加茂郡追分の順で記され、架橋は三つで大井橋、籠川橋、平戸橋があり、平戸橋が最も長く、最近の架橋であるとしています。



平戸橋の図

明治15年ごろ 『愛知県西加茂郡地理小誌 全』

産物としては郡西南の各村で収穫される米が酒造に適し、古来加茂米として称賛され、挙母の挙母綿、長興寺、野見、山室村の建築石、野見村の蘭(イグサ)、市木村辺の伏^{ぶくりょう}苓(マツの根に寄生する菌核・漢方薬)、平井村の木材、猿投の岩千鳥(岩場に生育する小型のラン)・菊^{きくめいせき}銘石(菊石)、千鳥^{つくばね}の突羽根(ジャクダン科の半寄生低木)、広見(篠原)の硝子粉(陶土)、加納辺の鳥水晶、元山中(山中)の川海苔(清流に生育する緑藻・食用)、舞木の木炭、北部の各村は薪材・炭・木材・楮^{こうぞ}・漆^{けいせき}・川茸^{けいせき}・串柿^{けいせき}・珪石^{けいせき}・陶土等、木瀬、中山、李(藤岡町)の陶器、木瀬の生糸、下伊保^{しまぬの}の絹布、市場(小原村)の蘭^{いむしろ}席、平井の下駄^{いむしろ}菌、北曾木(小原村)の桃、千洗(小原村)の芋、白川(藤岡町)の碇^{がいし}子^し長平瓶(びん碇子)、矢作川の鮎^{いむしろ}・塩腸(うるか)、大々蔵連の山椒魚等があげられています。

このように今日では失われてしまったキーワードから明治初期の旧西加茂郡地方の自然と産物を垣間みることができました。

(松井孝宗)

() は筆者註

ふるさとの芸能“同族祭り” 高橋町水野氏の氏神 十二社の祭り

平成記念橋と猿投山を望む旧寺部の発端に鎮座する十二社（現・水間町）は高橋地内に居住する水野氏一統が氏子として祭祀する神社です。

市域では、同じ血縁の人々によって創建をみた神社は少なくありませんが、平成12年の現在まで一族で神社を維持し、祭礼も含めて全て同族のみで取りしきっている例は大変珍しくなりました。



十二社祭礼にあたり本殿への献撰

神社は「おじんしょ」と呼ばれ、水野氏の先祖は紀伊国新宮（和歌山県）から寺部の地へ移住したと伝えています。水野氏一統で供養する先祖歴代の初代と伝えている人は位牌に清光院寿貞大居士祥月命日三月十五日と刻まれています。没年は不祥で、市造という名前を残しているのみです。次の二代と推定できる先祖の名前は不明ですが、浄西居士慶長十三年（1608）戊申三月二十五日とあり、初代は慶長初頭から天正・文禄期頃にこの地に入郷したと思われます。現在地に故郷ゆかりの神社である熊野十二社を勧請し、水野氏一統が代々継承して現在にいたっています。

十二社の近くには、江戸期の正徳元年（1711）に水野氏の先祖が建立したと伝えられる浄土宗往生院があります。水野氏歴代の菩提寺となり、初代清光院寿貞はじめ一族の墓所になっています。

水野氏の同族祭りは、氏神十二社での神事と氏寺の往生院、随応院、東高院の三住職列席の先祖法要が二大行事となっており、3月15日を例祭とするのは、先祖の清光院寿貞の命日であることによると祭礼に詳しい水野康雄氏の説明がありました。十二社の祭礼は春

祭りで、3月14日が試楽^{しんがく}で翌15日は本楽となります。この他に1月1日は新年祝賀祭、12月15日は感謝祭を行います。

同族祭りは、水野氏一統12軒で祭りを行っていますが、現在、分家も増えて25軒ほどになっても例祭は本家格の12軒しか参加できないしきたりがあり、かなり古くからこの軒数で変わっていないとの話です。世帯主が他に用事がある場合は、女性でも祭礼に参加できます。また、高橋町より住居を移しても本家格の家は祭りに参列することが許されています。十二社は、祭神として天照大御神他十六柱を祀っており、3月14日・15日は、一年交代でつとめる年行司を筆頭に祭礼行事を行い、本殿に献撰後、野見神社宮司による祝詞、玉串奉典の神事を執り行ないます。14日の午前中は、境内清掃・のぼり立てなどの準備をすませ、午後2時に神事があります。



同族の先祖法要（年行司宅）

15日は午前11時に神事、年行司宅で昼食後、神社の後かたづけを行い、夕方の5時より年行司宅に11軒の世帯主が集合し、先祖法要が始まります。読経後、三住職を囲んで会食があり、年行司に当たった人の心づくしの料理が出されます。この時、必ず鯉こくがテーブルに乗りますが、いわれはわからないとのこと。なお、16日朝に往生院の墓所に参り塔婆をおさめて全ての行事を終えます。今は、世帯主12人のみの祭りですが、戦前は人出でにぎわいました。

県指定 池田第1号古墳

豊田市猿投町池田81



〔はじめに〕

弥生時代に続く時代を古墳時代と呼び、おおよそ4世紀から7世紀末とされています。市内にはかつて180基以上の古墳の所在が知られていました。その内何らかの形で残っているのは96基にすぎません。もちろんこれは確認できている古墳の数であって築造総数を示すものではありません。

今回はこの古墳の中で、県下でも有数の巨石を用いた横穴式石室を持つ池田1号墳を取り上げると共に古墳時代について考えます。

〔池田1号墳〕

池田1号墳は、猿投山の東南麓から南へ伸びる丘陵が、矢作川へ突出する中ほどの、標高119mの位置に作られた古墳時代後期(約1500年前)頃の円墳です。開口部は南西に向き、籠川の支流である猿投川と加納町の集落が一望される眺望の良い場所にあります。また、猿投川を挟んで藤山1号墳が所在します。さらに本古墳の南、1.5kmの同一丘陵上に、奈良時代に属する舞木廃寺^{しんそ}があって、現在、環状溝のある心礎をもつ塔跡部分が、国指定史跡となっています。



池田1号墳は、径約19m、高さ3.5mの円墳で、墳丘は、盛土が二段に盛られ、各々の段裾には角礫を用いた巻石施設^{かくれき}の手法がとられています。石室は長さ9.9mの大きさで、1つが1mから2mもある花崗岩約30個を使用して築造された県下でも屈指の巨石墳です。石室は、両袖型複室構造を持つ横穴式石室で、後室は長さ3.2m、幅2.4m、天井石は3枚で、中央石を1番高くしたドーム状の断面形状で、中央部で高さ2.3m、両端部で1.9mです。一対の門柱石は長方体の大型楣石^{まぐさいし}(横幅2.6m以上、縦幅0.7m、厚さ0.4m)でつながれ前後室の区画を形づくっています。前室は長

さ2.8m、幅2.2mで長方形の平面をしています。天井石は「く」の字状に架構することによって中央部を高くしてはいますが、さほど顕著ではありません。高さは2.3mです。各室と羨道^{せんどう}は、門柱石に鴨居状に架した楣石によって区切られ、羨道は、幅1.8mですが、門柱石に接する両壁の一石ずつを残して崩落しており、残っているのは長さ2mほどにすぎません。床面は前、後室ともに鶏卵大の円礫と粘土をつき固めた礫床^{れきしょう}です。石室用材で最大のものは奥壁で、縦・横共に、2m以上の一枚岩で形成しています。



この古墳は、大正4年頃の砂防工事の際に発見されたものですが、その際鎌倉時代の山茶碗の破片が発見されたことから、遠く鎌倉時代にすでに開口されたものと考えられています。

〔市内の古墳分布〕

古墳時代を支えたのは主として稲作農業です。稲作農業の場は河川堆積による沖積平野に展開されました。市内の古墳の分布は、矢作川とこれに注ぐいくつかの支流の流域に見られます。北部から、伊保川、籠川の各流域と矢作川流域北部、同中部、同南部に分かれています。立地形態からは2つに大別されます。1つは、標高100m内外の低い丘陵上もしくはその斜面、もう1つは沖積平野に隣接する台地の端につくられているものです。

今回は、籠川の流域の1つを取り上げてみました。機会があれば他の流域も取り上げていきたいと思えます。

発掘資料モノ語り

—新金山遺跡の土偶—

遺跡の調査は、現地で竪穴建物などの遺構や土器などの遺物を掘り出したりする作業だけでは終わりにはなりません。現地で調査を行った後は、調査した結果を記録として保存するため、そして、調査した結果を広く市民に公開するために、発掘調査報告書を作成しなければなりません。

そのため、遺跡から掘り出した遺物の汚れを落とす(水洗)、出土した位置などを示す番号を書き込む(ナンバリング)、破片をつなぎ合わせて元の形にもどす(接合・復元)、復元した土器などの図を作成し、清書する(実測・トレース)などの整理作業を行います。その他、現場で記録したデータや図面・撮影した写真などの整理も行い、報告書を作成する準備を進めます。

整理作業は、地道で根気が必要な作業ですが、この作業中に現場の作業中には分からなかった事実が発見されることがしばしばあります。

平成10～11年度にかけて調査を行った新金山遺跡(亀首町新金山)の調査においても、整理作業で発見された重要な遺物があります。それは、水洗の作業中に発見された2個の土偶です。

新金山遺跡は、古墳時代を中心とした集落遺跡で、現在のところ、縄文時代の遺構は発見されていません。2点の土偶も遺構からではなく、遺跡の調査範囲にあった谷状の地形に堆積した土から出土しました。そして、土が付いたままの状態では、土偶とも気付かずに普通の土器のカケラとして扱われていた遺物です。

しかしこの2点の土偶は、当時の遺構が発見されていない新金山遺跡でも、縄文時代の人々が活動していたことを静かに主張しています。



新金山遺跡出土の土偶

収蔵資料の紹介

平城京出土木簡(複製)

西三河に関する木簡は藤原宮・平城京・長岡京などから見つかり、その多くは篠島・日間賀島・佐久島からの塩の荷札木簡です。これらは奈良時代の税徴収などの解明に多くの情報をもたらしました。木簡から得られる情報は年々増加し、古代史の解明に役立っています。西三河に係る木簡の中には、藤原宮跡出土の「三川波豆評□嶋里」という木簡があります。これは国一評一里という形で、律令の行政組織の古い形での表記を用いていることが注目され、律令の組織支配が三河地方にも及んだことを読み取れる最初の資料と言われています。これ以後、荷札木簡を中心に平城京から数多くの木簡がみつっていますが、現在の豊田地域に直接関係する木簡はわずかに3点です。この3点の平城京木簡の複製を特別展「集落遺跡の語る古代矢作川流域」の際に作成購入しました。これらは今後の常設展示にも活用できる重要な資料です。

平城京139次調査SD2700出土木簡

「←国賀茂郡高橋郷物部千万呂」

賀茂郡高橋郷の名のみえる唯一つの木簡で、また、豊田市域における人物名が伺える最古の資料です。

平城京110次調査SK9090出土木簡

「・采女里○○知○里／□部里・長谷部里 □□里○青見里／前里○○石才里」

碧海郡の里が列記された木簡で、「里」で書かれていることから和銅年間(708-715)の木簡であることがわかります。この頃に遡って碧海郡にある8つの里の存在がうかがえることと「和名類聚抄」に名のない郷(里)がみられる点にこの木簡の重要性があります。

平城京57次調査SD650出土木簡「参河国加茂郡上□郷」

この木簡の郷名は「和名類聚抄」には該当する郷がなく、具体的に現在のどの地域をさしているのかわかりませんが、数少ない参河国賀茂郡名のある木簡です。



■平成11年度の主要事業報告■

◆展示

平成11年度の郷土資料館の入館者数（展覧会および施設見学者）は6,805人でした。年間を通じて2回の企画展と1回の特別展を開催しました。

※平成11年度入館者数 【内訳】 （単位：人）

大人	小中学生	未就学児	計
4,635	1,942	228	6,805

・企画展『縄文の祈り・古墳のマツリ―田中順三氏寄贈考古資料展Ⅱ―』

会期：H11.5.21～H11.9.5 入場者数 1,889人
埼玉県飯能市にお住まいの田中順三氏寄贈考古資料展の第2回目です。土偶・埴輪など約130点が展示されました。

・企画展『資料にみる 近代とよたのあゆみ』

会期：H11.10.29～H12.1.23 入場者数 1,392人
江戸時代の村がどのような変遷を経て、現在の町とになっていったか、また、明治時代からの豊田市域の合併の歴史などを、当時の資料や地図、写真パネル約80点で紹介しました。

・特別展『集落遺跡の語る古代矢作川流域―豊田市とその周辺における律令国家の地方支配を探る―』

会期：H12.2.21～H12.4.16

（H12.3.31までの入場者数） 1,248人

矢作川流域の古代集落と古代寺院の出土遺物を通して古代の豊田地域の現像を探りました。

また、特別展にともない、2月27日には崇化館公民館でミニシンポジウム「古代の幡豆・碧海・額田・賀茂」を開催しました。専修大学教授・荒木敏夫氏の基調講演などがおこなわれ、約100人が参加しました。

3月4日の史跡めぐりには、約30人が参加し、北野廃寺、安城市歴史博物館、舞木廃寺などを見学しました。

○図録『集落遺跡の語る古代矢作川流域』を刊行しました。

お詫びと訂正

31号の文中に誤りがありましたので、お詫びして訂正いたします。（P 5 松平氏遺跡 告示日）

【誤】平成12年2月9日 → 【正】平成12年2月4日

◆埋蔵文化財の調査・報告

豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書 第10集『南山畑遺跡』を刊行しました。

◆史料叢書の刊行

豊田史料叢書『渡邊半蔵家 家譜・勤書、他』を刊行しました。江戸時代に寺部地域の領主であった渡邊半蔵家の当主の略歴を記載した系譜や、家臣の職歴などの記録類を翻刻したものです。

◆資料調査・収集

《豊田市昭和史人物調査》

平成10年度から平成12年度までの3か年にわたる事業です。昭和初期から今日までの郷土の先人の生涯・業績等を調査し、また写真・映像フィルム等の資料を収集しています。

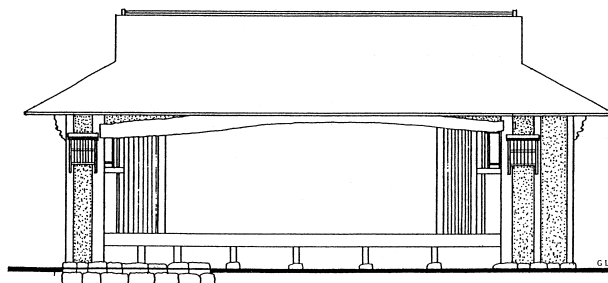


昭和期の資料

※懐かしい写真・珍しい資料等をお持ちの方はご連絡下さい。

◆文化財指定

岩倉神社舞台（中金町所在）を市指定・有形民俗文化財（第81号）に指定しました。江戸時代の農村舞台の遺構を残し、廻り舞台も現存しており、農村文化を知る数少ない建造物です。



岩倉神社舞台復元正面図

国指定・松平氏遺跡 平成6年4月15日の答申を受けて平成12年2月4日に告示されました。松平、大内町地内の松平氏館跡、松平城跡、大給城跡、高月院が対象です。

面積：59,520.82㎡、63筆

竜頭馬面は、戦国時代に出現したといわれます。騎馬戦における馬の防禦兵器であり、また相手馬を威嚇する効果を備えていました。馬鎧は本来、鞍を中心に前は胸と顔面を護る胸甲と馬面、後は腰から尾髪をおおう腰甲からなっているものです。



文化財シリーズ

32

かわせいのりゅうず ぼめん
革製竜頭馬面
(県指定文化財)

牛の生革を竜頭の木型に押し込んで固め、漆、朱、金を塗り、威嚇するにふさわしく、厳しい表情に仕立てられています。頭部の左右には金箔を施した角と耳が、中央に宝珠が付けられています。基部には頸を保護するため、周囲を鋸歯状に切り込んだ丸形の革板が付けられ、眼の上、上下顎の周囲にも鋸歯状の切り込みがされています。目はくり抜かれ、別の地で眼窩を朱、眼球を黒塗りで表し、また鼻と口は開口していて、いずれも朱が塗られ、口内には舌が付けら

れています。

この面は目に当たるところが空洞になっていないことから、実戦用として使用されたか即断できない状況です。

馬鎧の起源は日本では古墳時代まで遡り、和歌山市の大谷古墳に出土例が求められますが、古くは

朝鮮半島の伽倻地方から騎馬戦の風習とともに伝来したといわれています。戦での使用は鎌倉時代の末以後、『太平記』や『名徳記』に散見されます。

この馬面は三面あり、裏面にはいずれも朱書きがされています。濃州那田尾(現在の岐阜県美濃市)の佐藤才次良直信が、慶長6年(1601)に寄進したと記されています。

昭和33年に県の文化財に指定され、他の社宝と共に猿投神社の宝物殿に保管されています。

資料館NEWS

○特別展『集落遺跡の語る古代矢作川流域』盛況

平成12年2月21日～4月16日まで開催した特別展『集落遺跡の語る古代矢作川流域』が盛況のうちに終わりました。矢作川流域に分布する古代の集落跡と古代寺院から出土した各種の遺物が展示されました。開催期間中は史跡めぐりが実施され、水入遺跡・神明遺跡・舞木廃寺(豊田市)、北野廃寺(岡崎市)、安城市歴史博物館を見学しました。また「古代の幡豆・碧海・額田・加茂」と題してシンポジウムも開催され、地方と律令国家のつながりについて知る機会となりました。

○平成12年度展示計画情報

◆郷土資料館特別展

- ・『仮題 豊田市の城下町』
金谷城主・中条氏から江戸時代初期の城下町伊保、

挙母、寺部城下への経緯を探求し、遺品・史料を展示・紹介する予定です。

会期：(仮)平成13年2月16日(金)～3月18日(日)

◆郷土資料館企画展

- ・『古絵図展』豊田市域の絵図類を展示します。
会期：平成12年6月2日(金)～7月30日(日)
- ・『食の民俗』食と食器の民俗資料に焦点をあてます。
会期：平成12年10月6日(金)～12月24日(日)

◆棒の手会館企画展

- ・『猿投山麓の遺跡Ⅱ』
会期：平成12年3月18日(土)～7月30日(日)
- ・『猿投山の自然』
会期：平成12年11月2日(木)～平成13年2月28日(水)

利用案内

開館時間 9:00～17:00

休館日 毎週月曜日(祝祭日は開館)、年末年始

入場料 無料(ただし特別展開催中は有料となります)

交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分

名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分

愛知環状鉄道「新豊田駅」より北へ 徒歩17分

■豊田市郷土資料館だより No32■

平成12年6月30日発行

編集・発行 豊田市郷土資料館

〒471-0079 豊田市陣中町1-21

☎ (0565) 32-6561 FAX (0565) 34-0095

E-mail : rekihaku-toyota@mwd.biglobe.ne.jp